

説教余滴

『クリスマス百科』

たくさんのキリスト教書が、牧師室の壁面を埋めています。そのうち、どれが最初のものだろうか？ 考えてみました、思い出します。母教会で洗礼を受け、教会学校教師をさせていただいたとき、頂戴した本です。表紙裏に、櫻台教会の印があります。

『クリスマス百科』MRクライス著、沼野越子訳、昭和37年12月10日、朝日新聞社発行。
その上段に赤鉛筆で1962と書いてあります。私のメモです。22歳の時。

訳者あとがきに、著者紹介があります。

「1630年『アラベラ』という汽船が、一団の移民を乗せて、英国から米国に到着した。この船は『メイフラワー号』に次いで、米国史上で有名な船で、マサチューセッツ州の知事として高名なジョン・ウインスロップも乗客の一人であった。同じ船に、英国のケンブリッジの近くから来たリチャードソンという三兄弟がいた。その一人が、本書の著者メイミー・アール・クライス女史の先祖である。女史はオハイオ州スプリングフィールドで生まれ、同市のウイッテンバーグ大学を卒業しコロラド州の高等学校で教えた。・・・」

その後、結婚、死別、三つの大学で英文学その他を研究、ドイツの二大学への留学、1943年以降は著述に専念。1957年、女史は世界一周の途中日本に来遊。その時以来の交友があり、本訳書に至りました。

本書は、同類書の嚆矢となりました。さすが朝日新聞社、目の付け所がいいなあ、と感じました。その後、キリスト教の出版社からも多数出版されています。

「むかし、ユダヤの国ベツレヘムの野原で」と〈クリスマスのおこり〉を書き始めた本書は、15項を経て、〈カロール中心の催しのこと〉に至り、「われわれが・・・合唱に参加する時、我々は正義が最後に勝ち、『地には平和』が現実に出現するという信念を持つのである。」と締めくくります。